

# 大正時代における女性同性愛を巡る言説 ——「同性の愛」事件と吉屋信子『花物語』を中心に

鄒 韻

## 一. はじめに

リリアン・フェダマンは『レスビアン<sup>1</sup>の歴史』において20世紀アメリカにおける女同士の愛情を「ロマンティックな友情」と名付けた。しかし、ヨーロッパの性科学の導入により、経済的自立が可能となった女同士の間の熱烈な絆の強まりは、「胸ときめく友情」から病態化し、「侵食する役目を果たした」という。

20世紀初頭の日本においては、ドイツの医学者・精神科医であるクラフト＝エビングの『変態性欲心理』(後述)が導入された後に、アメリカと同様、「変態」と呼ばれる「同性色情」は猟奇的なものとして当時の人々の目を引いた。一方、同時期の女同士の絆が日常的に存在したことが、『青鞥』を場とするフェミニストや、無産階級の女工<sup>2</sup>や娼妓<sup>3</sup>の心中事件等の歴史資料から伺える。特に、女学生の親密な交際は、社会的・文学的なサブカルチャーを開花させた。雑誌の投稿欄を交流の場としていた各地の女学生たちは擬似的な姉妹関係として結ばれ、愛読者大会の開催や手紙のやり取りをしていた。明治末期から「お目」<sup>4</sup>と呼ばれた女学生の「ロマンティックな友情」は、少女雑誌の繁栄とともに「エス」<sup>5</sup>という言葉に収斂されてきた。文学において、明治末期には、田村俊子の『あきらめ』や、『女子文壇』、『少女世界』において少女の絆が繰り返し描かれた。特に、大正時代においては、少女の間の恋愛物語を描く吉屋信子の『花物語』が人気を博し、少女雑誌だけではなく、『令女界』などの少女より年上の若い女性をターゲットとする雑誌によってもこうした濃厚な友愛物語が模倣され、流通した<sup>6</sup>。後の昭和前期にも、『少女の友』に掲載された川端康成の『乙女の港』、『花日記』などの小説が再び「エス」の大ブームを引き起こした。

性科学の導入は女同士の「途切れのない連続体」<sup>7</sup>に、何をもたらしたのか。同性愛の性的行為を病的倒錯と看做す性科学の影響により、例えば、平塚らいてうは「茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ」に書かれる尾竹紅吉(一枝)との熱烈な愛を切り捨て、紅吉を性的倒錯といった先天的な病に位置づけ、自身の性欲の正常性を訴えた<sup>8</sup>。『青鞥』誌面においても完全に同性愛排除が見られるようになる<sup>9</sup>。

近代日本における女性同性愛と「ロマンティックな友情」に対する先行研究として、竹村和子と赤枝香奈子の研究が挙げられる。竹村は、「女同士の愛は結婚制度と抵触せず、むしろそれを補完する制度とみなされた。その理由は、女同士の愛も、結婚制度の中の異性愛と同様に、女にとっては同じ位相で(性に受動的というファンタジーで)『正しいセクシュアリティ』の規範に合致していたためである」<sup>10</sup>と、近代アメリカ女性とセクシュアリティの問題から日本の文脈を推論する。一方、

1 リリアン フェダマン(1996)『レスビアン<sup>1</sup>の歴史』、筑摩書房、8-9頁。

2 1911年7月30日の「東京朝日新聞」において、「二少女情死を図る」と、仲良しの女工が心中することが報道された。

3 1935年5月8日の「東京朝日新聞」と「東京読売新聞」に、吉原の娼妓の同性心中事件が報道された。

4 赤枝(2004)によると、1909年9月11日に『読売新聞』の記事に「女学生間に『お目』なる異様の風習あり元祖学習院女子部大売捌虎門女学館今や都下全校に全播す▲お目とは女性同志の間に起る変則の愛情也当局者果して此風習の結果に就て研究する処有や」と掲載される。(赤枝香奈子(2004)「おめとエス」『性の用語集』(井上章一・関西性欲研究会編)講談社、267-274頁。)下掲の『変態性欲論』も「お目」などの異名も紹介される。

5 1910年『少女世界』の投稿欄において、「エス」という言葉が非常に流行っていた(佐藤(佐久間)りか(1996)「清き誌上でご交際を一明治末期少女雑誌投稿欄に見る読者共同体の研究」、女性学(4)、日本女性学会、136頁)。そして、1926年4月号の『少女画報』の「女学生隠し言葉辞典」によると、同時代の少女雑誌において繰り返し語られた「エス」は「sisterの頭文字、お姉さん、妹さん、等の意。主として妹に使用」と説明される。1928年2月号の『婦人公論』の「女学生間に流行する隠語」に、「エス」は、「お姉さま、妹の一對をさしたものと紹介される。

6 詳しくは、久米依子(2001)『「少女小説」の生成 ジェンダーポリティクスの世紀』(青弓社)を参照。

7

セジウィックは男の絆と女の絆の非対称性を指摘している。男同士の性的絆は非性的絆から完全に断ち切られているのに対し、女の連帯の「ホモソーシャル」的な関係を、「途切れのない連続体」とであると述べる。リッチも「レズビアン連続体」という主張において示しているように、女同士の絆は女性ジェンダーが存在するからこそ、二元論を超える結びつきが可能である。(イヴ・K・セジウィック(2001)『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』(上原早苗、亀沢美由紀訳)、名古屋大学出版会。アドリエンヌ・リッチ(1989)『血、パン、詩。』(大島かおり訳)、晶文社)。

8

吉川豊子(1998)「女性同性愛」という病とジェンダー(中山和子・江種満子・藤森清『ジェンダーの日本近代文学』)、翰林書房、103-117頁。

9

赤枝香奈子(2011)『近代日本における女同士の親密な関係』、角川学芸出版、58頁。

10

竹村和子(2002)『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』、岩波書店、48頁。

11

同注9。

12

同注10、47頁。

13

同書は1894年に日本で『色情狂篇』というタイトルで出版された。

赤枝は日本ではアメリカと異なり、「エス」の主体である少女が、経済力を持たず、自立できない未成年であることを指摘した。さらに新潟心中事件に焦点を当て、女同士の親密な関係を三つに分類する認識枠組—「通常の友愛／病的友愛／病的肉欲」<sup>11</sup>—が現れたと述べ、後に、友愛・肉欲を線引きする同性愛のカテゴリーが徐々に成立してきたという。

以上の通り、先行研究は主に女同士のセクシュアリティの規範に主眼をおき、近代における女性同性愛・異性愛を考察している。先行研究では、近代日本における女同士の絆は制度的には異性愛規範に抵触しなかったが、実社会で問題化するにつれて友愛・肉欲を基準に線引きされるようになったという重要な示唆がなされている。しかし女同士の絆は、必ずしもセクシュアリティだけを基準として区別されたのではない。なぜなら、竹村が指摘しているように「女の「性欲は希薄」であり、性行為の規範はペニスの挿入とみなされていた」<sup>12</sup>近代の文脈において、女性同性愛の問題は男性と大きく異なると考えられるからだ。また先行研究は、当時日本で受容されたばかりの性科学が生成する知の空間を踏まえて女性同性愛を巡る言説を明らかにしていない。

したがって、本論は、性科学の知の言説空間において、女性をめぐる同性愛と異性愛において構築された二元論的な線引きを考え直そうと試みる。まず、日本近代におけるセクソロジーの流布に伴う「同性愛」排除の背景に、ヨーロッパから導入された性欲論の繁栄を認め、「女性同性愛」がどのように語られているのかを明らかにする。さらに、1920年の奈良女子高等師範学校の「同性の愛」事件と吉屋信子の『花物語』の「白百合」を中心に、酷似した出来事・物語を巡る言説を対象とし、大正時代における病態化された同性愛・ロマンティックな友情と看做される少女の友情を考える。

## 二．性科学における女性の「同性色情」

1913年リヒャルト・フォン・クラフト=エビングの『変態性欲心理』<sup>13</sup>(Psychopathia Sexualis)が大日本文明協会によって出版された。東京帝国大学の医学博士、呉秀三による序文において、性科学が、個人の身体の強健、生活の歓楽から「社会の秩序的発達乃至政教の調和的整備」、さらに「国家民人の為め」の「大成利益」に至るまで関わっていると記されている。文明開化の一環として、この「啓蒙」的な性科学は正しいセクシュアリティを成立させることを目的としていたことが確認できるであろう。『変態性欲心理』が出版された後に、「変態」をセールスポイントとする性科学は通俗化され、『変態性欲心理』の図式を踏襲し、澤田順次郎、羽太鋭治らによって性欲に関する本が出版され、ここに日本における性欲「科学」が開花した。以下では日本の性科学の基盤となる『変態性欲心理』が語る「同性愛」の図式を論究し、更に日本のコンテキストにおける女性「同性愛」の受容に関して分析する。

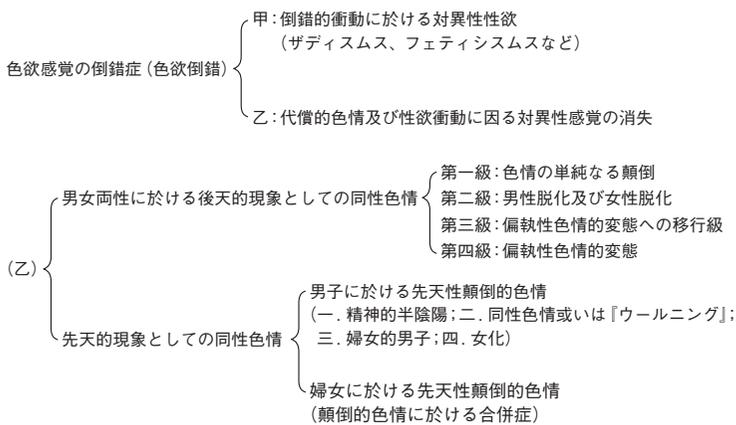
## 1. 『変態性欲心理』における女同士の「同性色情」

まず、『変態性欲心理』による「同性愛」は「同性色情」と称され、「ザディズムス」や「フェティシズムス」<sup>14</sup>などの「倒錯的衝動に於ける対異性性欲」というカテゴリーと、同じく「色欲感覚の倒錯症(色欲倒錯)」に所属させられる。ここで、倒錯の解釈は、「自然的色情的飽満の機会が禁ぜられたる場合も一自然(即ち繁殖の目的)に相当せざる色欲的表現が包含せらるゝなり」(87頁)と述べられている。「代償の色情及び性欲衝動に因る対異性感覚の消失」とタイトル付けられたように、繁殖を目的とした異性愛の性欲こそが正当な「色情」であり、それを満たさない場合、異性愛の代償となる性的欲望・行為は倒錯だと見做される。

14

『変態性欲心理』による近代の訳語で、現在では通常、「サディズム」、「フェティシズム」と訳される。以下同様。

図 『変態性欲心理』における「性倒錯」分類(筆者作成)



上の図が示しているように『変態性欲心理』による同性色情は、後天的なものと同性的なものに分類されている。こうした先天/後天といった分類、すなわち同性色情の病因による分類は、この本の中心に論じられる「変態性欲」によるものであろう。「変態性欲」は、遺伝による先天的な変質そして生殖器の濫用(特に手淫)による後天的な変質に集中して分析されている。しかし、黒岩裕市<sup>15</sup>が指摘したように、先天的/後天的な分類の区分は当時の精神医学において重要な論点ではあるが、その実は不十分で「困難に陥って」おり、「後天的な同性愛は、先天的なその一部としてとらえられる傾向がある」と論じられた。さらに、「同性色情」の症状は軽度から重度まで階層化されている。軽度の第一級は「単に精神的半陰陽」である。症状が重くなれば、精神的な変質だけに留まらず、身体が精神に従って変質していくという。第二級になると、男性脱化及び女性脱化と称せられ、「患者(男)は……女性として感覚する人格の意味に於ける傾向を獲得す。寧ろ受動的色情的行為に対する意味のみを有す」(238頁)という。第三級になると、「婦人的男子」・「男子的女子」への移行、さらに第四級では、「女化」(男性)・「男化」(女性)へと徐々に「悪化」していく。女性の場合、「第三、第四の階級に於ては同性の愛せるものに対し、他動的なる位置に於て、模型陰茎を利用し、以て

15

黒岩裕市(2008)「規範化される性愛観念とその変容—日本近代文学における男性同性愛表象」、一橋大学大学院博士論文、2008年3月、43頁。

満足を招致す」(314頁)という。

以上の四段階から考えると、「同性色情」は既存の正しいセクシュアリティの規範と思われるものを基準とし、成立している。その規範は性を中心としながらも、性行為における男性は他動的であり、女性は受動的であるといったジェンダー役割の上に定められたものである。その男らしさ＝他動的／女らしさ＝受動的といったジェンダー役割から逸脱するにつれて、精神的なものから身体的なものまでが変質していくことで、精神病と看做される「同性色情」の倒錯症を患うことになる論じられている。

さらに、女性と男性同性愛を比較すると、男性同士の「顛倒の色情」に対して、女同士の「同性色情」は希少であることについて、その理由として生来から肉欲が顕著ではないことが述べられている。男性の、同性愛と異性愛は「性欲」が基準とされる一方で、女性は「教化の結果として」性欲の持ち主であると認められないと解釈されてきた。こうして『変態性欲心理』における女性同性愛の表象は、男性同性愛と比較すると顕著ではなく、肉欲的でないと指摘されている。

では、『変態性欲心理』の女性同性愛表象は、性科学ブームが巻き起こった大正時代、どのように日本のコンテクストに導入されたのか。以下は『変態性欲心理』と比較しながら、澤田順次郎・羽太鋭治の『変態性欲論』を中心に、日本において受容された性科学における女性同性愛の表象に関して分析する。

## 2. 日本における性科学の受容

『変態性欲心理』を踏襲し、澤田順次郎、羽太鋭治は1915年に最初の日本人の性欲学者として、単行本『変態性欲論—同性愛と色情狂』を書き上げた。この出版は大きな話題を呼び、18刷まで増刷され、商業的大成功を得た<sup>16</sup>という。

『変態性欲論』は、クラフト＝エビングの論点を踏襲し、更に一般的な日本の読者向けに専門用語を避け、そして日本の例を挙げることで、読者の興味を引くように書かれている<sup>17</sup>。黒岩によると、『変態性欲論』は商業性が強く、非「科学」であり、「同性愛の神秘性がより明示的になっている」<sup>18</sup>と指摘されている。さらに、近代女性同性愛を中心とする言説に影響する二つの問題点を提示していきたい。

まず、第一の問題点は女性同性愛の性的な要素が一層無視されていることである。クラフト＝エビングによれば、女性の性欲は、「教化の結果として」と、女性の性欲が不顕著である理由を、社会のジェンダー規範を内面化した結果であると捉えている。さらに「肉なるよりは寧ろ精神的なり」と女性が恋愛を重視することを指摘しながらも、以下のように女性間の性行為に関して言及している。

又女子にありては、催淫的部位の十分なる刺戟に依りて男子の射精と同様な機転を惹起し得。而して之に作用する行為は交接の代理たるを得。又模型陰莖を応用して自然的性欲的行為に近きものが行はる。催情的部位の刺戟は女子間の行為に於ては通常クニリングス、或は相互陰部摩擦に依りて行はる。(下略)(『変態性欲心理』・306頁)

16  
同注15、47頁。

17  
例えば、「女性間性欲」に関して日本の「といちはいち」、「おめ」、「おでや」などの異名が紹介され、西鶴の「一代女」などの小説における「女性間性欲」が挙げられる。

18  
同注15、48頁。

クラフト=エビングの論説を全体的に受け継いだ『変態性欲論』であるが、性行為に関する論説に関しては、すべて省略されている。『変態性欲論』では、同性間の「プラトニック・ラブに傾けるもの多く」と強調し、女性同性愛の精神性が明示されている。また同性間の「友誼」と同性間の「恋愛」の相違に関して言及されている。そして、澤田・羽太は「女性性欲と友情との区別」に関して、16に及ぶ論点をまとめ<sup>19</sup>、日本のコンテキストから女性同性愛を論じ、原作と異なるオリジナルティを加えており、性的要素に関しては、ほとんど言及していない。

二点目はジェンダー越境が更に強調されていることである。『変態性欲心理』の大部分を踏襲する『変態性欲論』においては、「同性色情者」の分類は保留されながらも、事例はそのまま引用され、表現すら変更されることなく使用されている。変更された点としては、女性同性愛の特質に関して簡条書きへの書き換えが見られる<sup>20</sup>こと、各段階の解説で女性同性愛が具体的に定義されるようになったことである。このように、原作においては総括的に述べられていた特徴を、『変態性欲論』は具体的に列挙することによって、従来曖昧にされてきた女性同性愛の表象に性差を付して認識しているといえることができるだろう。

『変態性欲論』における女性同性愛の論説においては、セクシュアリティの問題は不問とされ、ジェンダーの差異の上に論じられている。男性同性愛とは異なって、女性の「同性色情」は精神的なものとされ、さらにはジェンダーの境界線を逸脱する行為→トランスジェンダー・トランスセクシュアルに相当することが同性色情だと定義されている。女性同性愛は「男らしさ」と結び付けられ、後の性科学における女性同性愛表象に大きく影響を与えた。

1921年出版された羽太鋭治の別の著作、『若き男女の心得べき性慾の智識』（誠光堂）においては、女性同性愛について次のように語られている。「同性間の愛を好む女の型に就ても少しく述べ様に、此種の婦人は女性としてよりも肉体、性格共寧ろ男性に近きものである」（227頁）。また、同年出版された『恋及び性の新研究』（博文館）においても、クラフト=エビング論を踏襲し、離婚したある婦人は「体格頑強であつて、酒を好み、煙草を喫し、男装をなすことを好み、同性を愛する傾向著るしかつた」（323頁）と述べている。そして「乗馬とか、其他の男子の為すことを好み、舞踏のやうなことは大嫌ひであつた」（323頁）と、女性の同性色情に説明を加える。女性同性愛の肉欲／精神の要素が言及されず、身体・趣味などの面に現れる男らしさからのみ、女性同性愛者であることが定義されるようになっていることをここから窺い知ることができるだろう。

このように表象される女性同性愛像は、羽太鋭治の独自の见解によるものというわけではない。当時の通俗性欲論において、女性同性愛=男らしい女性という図式は普遍的なものとされていたのである。例えば1922年、大塚脛三の『女性医学』（朝香屋書店）では、「同性愛婦人は男装をしたがる之れ精神状態に異常のある徴候である。又体格も男性的なのがある。喉頭の發育、毛髪の過生、男子の様な歩き振り等慥かに変態を現はす」（40頁）と述べられている。また、田中香涯（1923）の『女性と愛欲』（大阪屋書店）においては、女性同性愛者が「女性でありながら

19

一.手紙の往復。二.写真の撮り方。三.髪のかみ方。四.家庭に於ける状態。五.娯楽の場所。六.意味ある笑ひの交換。七.夢の様な空想。八.執拗。九.庇護。十.嫉妬を起こす場合。十一.相手を他に奪われた時の感情。十二.庇護の仕方。十三.相手の姓名を樂書すること。十四.性交の浅き時と、深き時。十五.之れに対する自覚心。十六.成り行き。（『変態性欲論』235頁）。

20

例えば、「男性的女子」は男性的な遊戯に対する趣味において、自ら竹馬や戦争遊び、縄飛び、競走、紙鳶揚げの五点を書き加える。

男子と感じて、其の言語、挙動及び服装等悉くその顛倒した感覚に相当する許りでなく、其の身体の状態も男性に類似」(59頁)すると論じられ、女性同性愛=男らしい女といった図式の言説は一層定式化されていたことがわかる。

上述したように、性科学における「同性色情」の言説においては、性行為を中心とするが、ペニスの挿入することが性行為とみなされてきた。男性同性愛の性行為は、「挿入する側—男—他動的/挿入される側—女—受動的」という図式に沿って、挿入側—精神的半陰陽(軽度)と見做され、挿入される側—女化(重度)といった図式で認識されることとなる。竹村が「[ヘテロ]セクシズムが異性愛主義と性差別を両輪とした「正しいセクシュアリティ」を標榜する制度だとすればその双方によって負の意味付を与えられてきた女の同性愛こそ、この体制によって幾重にも沈黙させられてきたものである」<sup>21</sup>(〔 〕は原文のまま)と示唆しているように、女性の性的欲望は、不可視化されてきた。女性同性愛は挿入行為を伴うことがないことから、身体的女性らしさ/男性らしさによって定義される。このように、大正時代における女性同性愛は脱性化され、女性の性的欲望の獲得は、女性の男性化として認識されてきた。性を中心とする「同性愛」の定義に対して、女性同性愛は、かなり曖昧であり、定義されにくいものとなる。女性同性愛は、良妻賢母の異性愛者としての女性らしさとは一線を画した上で男性らしさと結び付けられ、当時の正しいとされたセクシュアリティ・ジェンダー規範から排除された存在として提示されてきた。

本節では西洋の性科学に発する日本の通俗性欲論の流通を追った。続いて、性欲雑誌や新聞等のメディアを通じて、同性愛を巡る言説はさらに注目を浴びるようになる。次に、大正時代のメディアにおける性科学の図式の受容、及び女性同性愛の言説に関して考察する。

21  
同注10、4頁。

22  
古川誠(1993)「恋愛と性欲の第3帝国——通俗的性欲学の時代」、『現代思想(日本の1920年代(特集))』21(7)、青土社、117頁。

23  
『変態心理』(1917)、『性之研究』(1919)、『性』(1920)、『性欲と人性』(1920)、『変態性欲』(1922)、『変態・資料』(1926)、『セックス』(1926)などが挙げられる。

24  
同注22、119頁。

25  
羽太鋭治:「同性の恋と色情狂の種々(婦人の性欲の話)」、『女の世界』、1916年3月;「婦人の変態性欲—男装婦人と同性愛の実例に就て」、『婦人界』、1921年1月等。

26  
肥留間由紀子(2003)近代日本における女性同性愛の「発見」(特集レズビアン/ゲイ・スタディーズ—科学の言説における同性愛嫌悪)、解放社会学研究(17)、9-32頁。

### 三. 「同性の愛」事件を巡る言説

日本における性欲論の流行は、上記の単行本のみならず、「送り手と受け手との交流の場である読者の相談欄が重要視され」<sup>22</sup>ていたことをはじめ、1920年代からは、一般読者向けに多くの通俗性欲雑誌<sup>23</sup>が刊行され始めるといふ経緯をたどる。単行本の読者は、殆どが当時の知識人であった一方、雑誌の読者層は新中間層、「中学や高等女学校の学生達」<sup>24</sup>であったことが確認できる。そして羽太を始めとする性欲学者は、性欲に関する雑誌だけではなく、婦人雑誌や女学生雑誌等にも文章を発表するようになっていく<sup>25</sup>。

一方、女学生の同性愛関係は明治末期からメディアに浮上し、人々に興味津津に語られる話題であった。そう行つた趨勢の中で、女性同性愛の「発見」<sup>26</sup>と言われる事件は、1911年7月26日の新潟親不知の海岸の女学生心中事件である。肥留間由紀子によると、当該事件の報道においては、女学生同士の同性愛に焦点に当てられたが、それ以前の女工や男性同士の心中事件では特に「同性」という関

係が注目されることはなかったという。また、明治末期に語られる「同性愛」は「女学校においてならば誰にでも起こりうる問題」<sup>27</sup>として人格と結びつけられることはなく、学校の教育問題として取り上げられている。しかし、性科学の導入を契機として、同性愛を巡る言説を、教育問題として回収することは困難となり、今まで同性愛行為と見做されてきた行動はもはや発達の一段階ではなく、個々人の人格と結びつけられるようになる。古川誠は、「1920年代には同性愛の認識図式がほぼ完成している」<sup>28</sup>と指摘している。以下は1920年に起こった「同性の愛」事件に焦点を当て、語られる女性同性愛を分析したものである。

これまでの女性同性愛を巡る報道では心中事件が多く見られる。一方、1920年の「同性の愛」事件は、心中や性的要素と関連なく、女学生の退学処分を巡る女性同性愛の報道である。「渡辺、坪井の二人は午後六時の門限を過ぎてから僅か三分間で行かれる渡辺先生宅を訪問せんとして中途引き返す折に寄宿舎の御用八百屋の裏の土堤道から入つたと云ふだけが教育の趣旨に反すとて学生としての最も重い退学の処分を受けたのであります」<sup>29</sup>と1920年8月11日に、読売新聞において奈良女子高等師範学校における女学生の退学事件が報道された。女学生たちが門限の規定を破ったことで「教育の趣旨に適せぬ」との名義で退学処分されたことに対して、同校生の女学生は「傍観するに忍びずとなし」、と不満を述べ「猛烈に運動開始」したという。しかし、噂の三人の「同性の愛」関係は「人格を傷つける」とこととされているのみで、今回の退学を引き起こす原因として認められることはなかった。

8月12日の報道<sup>30</sup>が続く中で、問題になった渡辺助教に釈明が求められた。これは「将来教育家として起つべき人の行動ではない」と猛烈な運動が起こったことに対しての釈明であり、噂となった「同性愛」への議論について触れられてはいない。

8月13日の報道において、「同性に対して不思議な魅力をもつ女 問題の人渡辺銆子は目下上京して独逸留学の準備中」と事件に起因する最初の猛烈な運動から「同性愛」へと読者の関心を移行させ、「問題の人」渡辺先生と「同性愛」に関する世論を盛り上げることとなった。

平素でも頭髮などぐるぐる巻きにした何れかと言へば男性的の人で、美人と言ふ程ではないが何となく人を牽き付ける強い魅力をもつた夫人です。多分それが禍して妙な風説を惹起し、又生徒から余り愛敬された結果人の嫉妬を招いたのでせう。

女に似ぬ無遠慮な男の様な性格が、先輩に増悪され同僚に避難された原因となったのだと思ひます。(1920年8月13日・読売新聞)

この記事のなかで、校長は三人の関係に関しては不明であると表明し、「入り組んだ他の理由がある」とだけは言つてよい」と、三人の「同性の愛」関係を強調するかのようであり、退学処分の原因については含みをもたせた。

その後、女学生の退学処分に対する上京運動を巡る報道は、校長による処分理

27  
同注26。

28  
古川誠(1994)「セクシュアリティの変容—近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」日米女性ジャーナル17、98-127頁。

29  
読売新聞(1920年8月11日)、タイトル:「奈良女高師の卒業生 恩師と同窓生のため 結束して上京運動する 噂に上った同性の愛」。

30  
タイトル:「問題の渡辺助教は目下辞表提出中 奈良女高師生の退学には門限云々以外の理由がある」。

由に関して追加報道されることはなく、「問題の人」とされた渡辺先生を中心として連日に渡り報道され続けることとなる。8月13日の上記引用文の報道の後、14日から16日にかけては「問題の人奈良女高師助教授渡辺銈子と女学生退学事件前後の真相」という題目で連続コーナーが設けられた。そして事件が起こってから二か月後の10月6日に渡辺が渡米することが報じられ、半年後の1921年4月15日には、「米国の渡辺銈子女史の近信」、同年7月4日に、「同性の愛の二女学生師を慕うて渡米」、10月3日に、「同性愛が動機で渡米した 渡辺銈子女史最近のたより」と、再び「同性愛」と冠した追加報道がなされた。

#### 1920年8月14日 「問題の人(一)」

山脇房子夫人が「渡辺は優れた美人と言ふほどではないが、目の刮然した色の浅黒い不思議に人を魅する力をもつてみます」と言ひ文部祥の某督学官も「美人ださうですよ」と同性の愛云々を否認する一方、意味あり気の笑を洩らすし、赤司普通学務局長までが「渡辺は美人だ」と証明する。復校運動の擁護者たる菊池ちえ子も「渡辺さんは美人ですよ」と恥ずかし気に証明する。

上の報道文は、渡辺の出身校の校長である山脇女史のインタビュー記事である。タイトルの「同性に対して不思議な 魅力をもつ女」や、文章中に現れる表現、「女に似ぬ」、「男の様な」などから考えると、渡辺の女性らしくないところが同性を惹きつける原因となると述べられている。渡辺の知人に対するインタビューにおいては、「美人」を巡って語られ、「意味あり気の笑を洩らす」などの表現から、渡辺を揶揄する風刺的な意図を読み取ることができる。さらに、後の「問題の人(三)」において、裁かれるべき渡辺は、アメリカへ留学し、のうのうと暮らしていると、皮肉めいた報道がなされた。

読売新聞の他にも、『婦人公論』(1920年12月)にて「二生徒の退学問題から暴露した奈良女子高等師範学校の裏面」<sup>31</sup>、「奈良女子高等師範学校退学処分真相」<sup>32</sup>と取り上げられ、学長による退学処分の裏にある意図に関する議論が交わされた。また『女学世界』(1920年10月)には、当時の女性教育者、渡邊たみ子の論説が掲載された。「同性の愛」と題されたこの論考は、この事件に関する真相は不明であると前置きをした上で、女学生間のロマンティックな友情は医学者たちの言うようなものではないと断じ、「男子の方々は女性同志の愛に就いては非常に好奇心を持つていることに触れ、「自分たちの経験から想像する様な語の出来ぬ秘密など」ではないと、男性からの邪推に批判を述べている。さらに、女同士の絆は「純粹な靈的のもの」で、「友情以上の、恋愛に近い程の強烈なもの」、「最高最上の友情」である一方、「男子間に行われる同性の愛と云ふものとは全然異なつたものだ」と語られる。同時期のメディアにおいては、与謝野晶子<sup>33</sup>、神近市子<sup>34</sup>や吉屋信子<sup>35</sup>の言説から、女学生間の「エス」関係は脱性化された「愛」と結び付けられ、性欲論ブームの中から排除すべきものであるとされてきた。肥留間が指摘したように、大正時代には、「女学校における親密な関係性はそのような「病的」なものとは切り離されていく」<sup>36</sup>。

31 中村孤月、『婦人世界』、1920年11月

32 月見草、『婦人公論』、1920年12月

33 与謝野晶子、「同性の愛」〈自伝の一節〉、『女の世界』、1917年5月

34 神近市子、「同性恋愛の特質」〈二人の女性の間に見る同性愛〉、『新小説』、1921年11月

35 吉屋信子、「愛し合ふことゝも」、初出同上。

36 同注26。

以上の「同性の愛」事件をめぐる言説の考察から、性科学の流行を背景にして、「同性愛」は、当時の人々の興味をひく話題であったことが明らかになる。この事件では、はじめ二人の女学生の退学処分に対する抗議や運動が話題をさらったが、同性愛に関する噂によって、「問題の人」渡辺先生に人々の興味が移行していく。読売新聞の報道からは、既に女性「同性愛」と男性的な女性を結びつける図式が形成されていたことがわかる。

さらに、明治末期から大正期の同性愛を巡る言説において、同性愛の解釈が当事者間の「行為」から個々の「人格」へと移行していくことに注目したい。フーコーは、同性愛が病理学的範疇において成立させられた時期に、「かつて男色家は性懲りもない異端者であった。今や同性愛者は一つの種族」<sup>37</sup>になったと論じている。言い換えれば、上野千鶴子も指摘しているように、近代になって初めて、「同性愛者」という存在が認識された<sup>38</sup>。上述の報道や論説の「同性に対して不思議な魅力をもつ女」、「問題の人」等の言葉が反映しているように、女性同性愛は、その人の属性、アイデンティティの一つと看做されていたことが分かる。一方、教育者である渡邊たみ子の文章からは、女学生のロマンティックな友情の性的要素に対する否定とともに、男性同性愛への言及を通じて、同性愛者の存在自体を否定していることも読み取れる。

さて、女学生間のロマンティックな友情—「エス」関係は当事者である女学生たちのコンテクストではどのように語られるのか。次に、同時期に女性同性愛と見做されなかった女学生の「エス」物語を中心に、「同性の愛」事件と相似する出来事である、花物語の「白百合」を中心に考察を試みる。

#### 四. 「白百合」における「エス」

「エス」という言葉は女学生の親密な関係を表す言葉で、同級生、上級生と下級生、また女学生と女教師にも適用される。上述したように、学校や地域によって呼び方が異なる<sup>39</sup>が、明治末期から昭和前期にかけて、「お目」から徐々に「エス」に収斂してきた。「オメ」とは、赤枝<sup>40</sup>によれば、女学生の間に流行っていたこの「お目」の隠語である。その後1911年の女学生の心中事件報道により、「お目」を「男女」と表記することとなる。「オメ」という単語の表記から、男と女のジェンダー役割といった異性愛中心主義の支配・介入を読み取ることができる。あるいは、同性愛関係を異性愛に喩えるのではなく、赤枝が指摘しているように、男のような女を意味し、江戸期から由来する「半陰陽」を意味する。一方、後の「エス」は「sisterの頭文字」で、姉妹関係を表すものである。「オメ」の表記から「エス」への変遷は、言葉が抽象化されたことによって、男性らしい女性＝女性同性愛といった図式が回避されていると推測できるであろう。「エス」は、こうした性科学の言説空間において、女同士の親密な関係を表す言葉であり、女らしさを想定させるシスターを含意する。さらにはミッションスクールが無数に存在した当時の

37

ミシェル・フーコー(1986)『知への意志(性の歴史)』(渡辺守章訳)、新潮社、56頁。

38

上野千鶴子(1996)「セクシュアリティの社会学・序説」『セクシュアリティの社会学』、岩波書店、1-24頁。

39

注17を参考。ほかに、「オカチン」、「パウ」、「ハンドイン」、跡見女学校では「ご親友」、学習院では「おハイカラ」、お茶の水では「オネツ」などの呼び方もあるようだ(稲垣恭子(2007)『女学生と女学校—教養・たしなみ・モダン文化』、中公新書、103頁)。

40

同注4。

社会状況を背景として、女学生にキリスト教的な純潔で「清い」イメージを付すことで、女同士の関係を「安全」な良妻賢母の規範の枠組みに収斂させたと言えるだろう。

41  
稲垣恭子(2007)、同注39。

42  
佐藤(佐久間)りか(1996)「清き誌上でご交際を」—明治末期少女雑誌投書欄に見る読者共同体の研究」、女性学(4)・日本女性学会、114-141頁。

ロマンティックな「エス」関係においては、頻繁な手紙のやり取りを通じて、交流・交際が行われてきた。戦前の女学生の手紙を分析した稲垣<sup>41</sup>によれば、手紙の交換は、相手への憧れや思慕に溢れている。また、一緒に登校したり、互いに家を訪問し合ったりと、買い物や勉強などの日常生活の行動も共にする。佐藤(佐久間)<sup>42</sup>の少女雑誌投書欄の研究によると、学校という現実の空間の他に、主に少女雑誌の投書欄を通じて、「清き誌上でご交際を」求める。同じ学校に通う学生であっても、ペンネームを使い、雑誌を通じて私的なメッセージを交換し、投書を通じて、「現実のアイデンティティから解き放たれ」ていく。このように演出される「エス」関係は、現実と虚構、日常と非日常の境界を打破し、虚構を模倣する行為と、現実を虚構化する行為となっていく。前述した「同性の愛」事件も、性科学やメディアの言説空間では「病的」とされ封じ込められてきた少女の物語が、現実化・事件化した例であると言えよう。

43  
洛陽堂(1920年)、交蘭堂(1924年~1926年)、実業之日本社(1939年)

次に、「同性の愛」事件と酷似した物語——同時期少女雑誌で一世を風靡した『花物語』シリーズの「白百合」を中心に、テキストにおける「エス」の表象について考察する。吉屋信子の『花物語』は『少女画報』に1916年から1924年にかけて掲載され、連載中であるにも関わらず三回<sup>43</sup>にわたる再版が決定された人気小説である。最初の七話が1916年に『少女画報』に掲載され、好評を博し、吉屋は『花物語』を総題として9年にわたって、一話完結形の短編小説を連載した。『花物語』は、少女を巡るロマンティックな物語を描いたものであり、主に同級生の間の恋愛物語が扱われ、他には上級生と下級生、姉妹、女教師と生徒の間をモチーフとした思慕の物語も語られる。

このシリーズの一篇「白百合」は1918年8月と9月に『少女画報』に連載された短編小説であり、1920年の「同性の愛」事件と酷似した音楽の先生と二人の女学生を巡る物語である。ここで「白百合」のあらすじを簡単に確認したい。葉山先生は新しく転動してきた音楽教諭である。葉山は「一週間もたたぬ間に、もう全校に『葉山病』が流行」と描かれ、学校で人気者となっていた。語り手の「私」は女学生であり、「先生のためになら、いつでも焰の湖に喜んで飛び入る心を捧げ」るほど葉山に惚れてしまう。「私」は気弱で、学校では葉山に近寄ることができず、いつも外出するときに、こっそりと、日々学校の近くにある葉山の宿まで遠回りして歩いてゆく。「私」はある日、S子さんに誘われて、葉山を訪ねることを口実に、学校を休み「噫無情」(Les Misérables)の活動写真<sup>44</sup>を見に行った。寄宿舎に帰りついたときに、門限の時間を過ぎたことで、舎監の先生にひき止められる。舎監の先生が手紙で葉山に事実を確認すると、葉山は嘘をついて「私」とS子を庇う。

44  
活動写真：映画という意味である。

ストーリーは「同性の愛」事件に酷似しているが、事件以前に発表された作品なので、新聞に報道された事件に基づいて虚構化した物語ではない。後の事件が、

物語におけるロマンティックな関係を現実にも倣したものであった可能性はあるだろう。

まず、女教師葉山の描かれ方を分析する。この短編は少女の一人称語りによって、葉山への思慕が語られる。転勤してきた葉山は、

銘仙のあっさりした柄のお召しものをおつけになって学生時代からのらしい紫紺のお袴を品よくおはきになって、ややうつむきかげんに小脇に譜本をかかえて、音楽室の前の廊下をお歩きになるところなど、もし肩上げのないのに気がつかなければ上級の方と間違えそうでした。(159頁)<sup>45</sup>

ある方は、ダンテの神曲に出て来るベアトリーチェの様に美しいフロレンスの都の姫にも比すべき葉山先生と讃えれば、ある方はミケル・アンジェロの描いた聖書のマドンナにもたとえようかと憧れ、私はもうどんな美しい人にもくらべる事ができない!と泣いて涙ぐんで溜息をつく方もございました。(159頁)

「すらっとした優しいおからだを、おずおずと壇の端に立たせたとすると、はにかんで、お顔をおあげにならず、下うつむいていらっして」、「一言二言お口の中で囁くように」(158頁)等、葉山は名作や名画の美女にも比べる事ができないほど美しいと女生徒によって語られる。登場する女性たちは、近代コンテクストにおけるジェンダー規範に収斂される良妻賢母にふさわしい女性らしさを演出する。「白百合」のみならず『花物語』シリーズでは、語られる女学生の性格描写には特徴がなく、むしろ彼女たちはしとやかで美しいといった語りで同質化され、同様の描写が繰り返される。物語に登場する愛し合う少女たちは愛と美の象徴である。そこで、女性だけの世界が作り上げられ、「女ならではの」優しさと愛しさによって少女は癒され、感化され、成長する。『花物語』の大方の短編に男性や男性らしさは不在であり、姉妹や母娘の絆を強調し、女学生たちは女だけの世界に閉ざされている。このように、女性同性愛が変態化された大正時代では、ジェンダーからの逸脱が同性愛者と結び付けられる一方、女学生のロマンティックな友情は、ジェンダー規範に収斂され、異性愛関係に対しても女性同性愛に対しても絶好な安全弁となった。

次に、女性らしさの演出によって醸し出される同性思慕のロマンティズムについて注目したい。まず、葉山先生の登場と共に流行っていた「葉山病(シック)」と呼ばれるロマンティックな感情について考察する。川崎は「白百合」テキストにおける「病(シック)」の象徴について、「病(シック)」の源の葉山先生が、音楽の教師であることは、共振、共鳴、同調によって増幅する「病(シック)」としての官能の性質とよく呼応する。葉山先生はピアノの演奏によって、また歌唱によって空気を振るわせ、少女たちを震わせる。」<sup>46</sup>と指摘している。テキストにおける抽象的、伝播的なイメージとしての「病」と「音楽」は同性の思慕のロマンティズムの象徴であろう。ここで語り手の私と想定された読者とが、ロマンティックな

45

吉屋信子(2009)『花物語』、河出文庫、以下同様。

46

川崎賢子(2014)「半壊のシンボル——吉屋信子と百合的欲望の共同体」、ユリイカ46(15)、45頁。

擬似恋愛感情を共有しあう。

語り手の少女は、葉山先生の登場によって、「葉山病」に「伝染」した。しかし、葉山先生はけっして「自分一人のものではなく、少女たちの憧れである。少女たちは自分の空想や片思いの気持ちに浸り、ロマンティックな擬似恋愛感を楽しむ。「私」は先生の名前を毎日の日記に、「いくつもペンでかかねば我慢できなく、「先生のことなら見逃すことは憧れの波打つ小さいこの胸が許さなかった」。外出の時に遠道してこっそり先生の宿の窓の下で様子をうかがう。「窓の内から優しいなつかしいまた愁わしげな歌曲が外面の灯ともし頃の柔らかい空気に溶けて流れ出ました。その歌声の妙に奇しくみやびなのは心ゆくまで味わえ」と、先生の姿を見られないにも関わらず、流れる音楽から片思いの情緒に陶酔している。「あなつかしいその声、その曲、その歌よ」、「私は、門限の時間に遅るるも忘れて、垣の外に立ちつくして、その歌に酔った」と「共振、共鳴、同調によって増幅」する「病」としての先生の音楽に酔いしれる。目に見えない抽象的な「病」と「音楽」は同性思慕の情緒を象徴する。女学生の葉山先生への思いは、必ずしも葉山先生の応答を期待するものではなく、むしろ自分のロマンティックな空想に陶酔しているだけである。このような「エス」物語は、結果的に同性愛の物語を生産するのではなく、同性間の親密な関係を通じてロマンティズムやセンチメンタルな情緒を生産する。読者の少女たちはこのようなロマンティズムを消費し、模倣する。

さらに、その情緒は精神的なものでありながら、『花物語』においてエロティックな情熱についても語られる。例えば、先生がピアノの個人レッスンの際、「私」の手をとって正しく直し、ついには手首を抑えたまま弾かせるシーンでこのように語られる。

私は息もつけずに胸はじいと香ぐわしい花束におし包まれたように一手には脈管の血潮が熱くほとぼしるようになって、そのまま鍵の上に面を伏せてしまいましたの、その時あの忘れぬ優しいしかし凛々しい声が頭の上に響きました。(161頁)

『花物語』の他の短編においても、このようなエロティックなシーンが描かれている。「私は熱した唇から情をこめて、その人の耳に囁いた。『永久に心からの友となりましょう』と……(白菊・110頁)」、「たちのぼる湯煙の中、仄かにも浮かぶ、その俯こそ、この世のものとはうなずかれぬ、神々しい美しい姿の半身であった……艶々しいも柔らかくに匂うが如き黒髪は、真白き額のあたり渦を巻いて左右に分かれて、優しい肩をすべって後に流れる」(「山梔の花」・93頁)と女性視点からのエロティックな情熱が語られる。さらに、「ふたりは、(友情)の垣根をいつか越えて来た」、「もう禁制の木の実の甘さを知ってしまった」(日陰の花・41頁)と、さらに直接的に友情からの逸脱性が書かれる。テキストにおける女性視線からのエロティシズムは、当時のセクシュアリティの言説空間において、病的な倒錯・変態とは見做されてはいなかった。むしろ上述のような少女ならではの情緒として

扱われ、作中の少女の語りの喜び・悲しみに対する読者の共鳴を求めている。

大正時代における女学生の親密な関係は、性科学の言説の導入と連動した「オメ」(男女)から「エス」へと移行し、エロティックではあっても安全なものへと収斂していく。少女雑誌は、現実と非現実の境界線を打破し、投書によってロマンティックな少女共同体を成立させた。吉屋信子の『花物語』の「白百合」は1920年「同性の愛」事件と酷似した出来事であるが、テキストに現れた登場人物は、しとやかで愛しい淑女として描かれ、後の事件では「問題の人」とされた先生像とは一線を画し、良妻賢母のジェンダー規範に収斂される。さらに、同性愛と人格とを結びつける言説において、テキストは登場人物を同質化し、少女の内面を語り、少女の絆を語ることによって感情を読者に共鳴させ、ロマンティズムを消費・模倣する。テキストに描き込まれたエロティシズムも、性的なものとしてではなく、少女の情緒を際立たせ「少女」のアイデンティティに結びつくのである。

## 六. 結論

本論は、性欲論ブームとなった大正時代における女性同性愛とロマンティックな友情を巡る言説を考察した。クラフト＝エビングの『変態性欲心理』から澤田順次郎らの論説まで、近代日本における女性同性愛は性的要素から切り離され、女性同性愛者と男性らしい女性とを結びつける言説空間が成立した。こうした大正時代の性欲論ブームを背景に、1920年の「同性の愛」事件で問題視されたのは、同性愛者と見做された「女に似ぬ」、「問題の人」としての一教師であった。ここで重要なのは、女性同性愛＝男性らしい女性という図式を受容のみならず、同性愛問題が、同性愛行為から同性愛者に転化し、人格と連結されるようになったことだ。ハルプリンが『同性愛の百年間』において論じた、「セクシュアリティは、性のアイデンティティを生み出し、われわれ一人ひとりの性をそれぞれに個人的な性質をもったものとした」<sup>47</sup>という現象がここに見られる。

このような歴史的な言説において、女学生の親密な関係は異性愛中心主義的な性科学の介入により、「男女」と表記される「オメ」から「エス」に収斂し、精神的な「愛」と見做されるようになる。同時代には一世を風靡した吉屋信子の『花物語』がある。『花物語』は少女共同体を描く小説の代表作として、少女の擬似的な恋愛の「エス」を描く小説である。しかしながら、その「エス」表象では、女性視線からのエロティシズムが語られながらも、登場人物は良妻賢母のジェンダー規範に囲い込まれ、事件として報道された女性同性愛の表象<sup>48</sup>とは一線を画していた。こうした女学生のロマンティックな友情は、同性愛の物語を生産するのではなく、女性同士の親密な関係を通じてロマンティズムやセンチメンタルな情緒を生産する役割を担った。

明治末期から大正時代にかけて、女学生の親密な関係は性科学の導入と受容と共に、こうした病態化される男性らしい女性同性愛者の方向と、ロマンティック

47

デイヴィッド・M・ハルプリン(1995)『同性愛の百年間』(石塚浩司訳)、法政大学出版局、43頁。

48

吉屋の成人女性向け小説、例えば後の『屋根裏の二処女』や個人誌『黒薔薇』に掲載された「或る思しき者の話」においては、さらに異なる同性愛表象の語りが見られる。

な女性らしい「エス」の方向に徐々に分離されていく。性科学の導入といった近代のコンテキストにおいて、「途切れのない」女同士の絆は、性行為そのものではなく、性をめぐるジェンダー役割、身体、アイデンティティを問題化したのであり、強制的な異性愛中心制度が構築され、補完されつつ、その制度に収まるものと収まらないものが意味を付されて振り分けられていったのである。